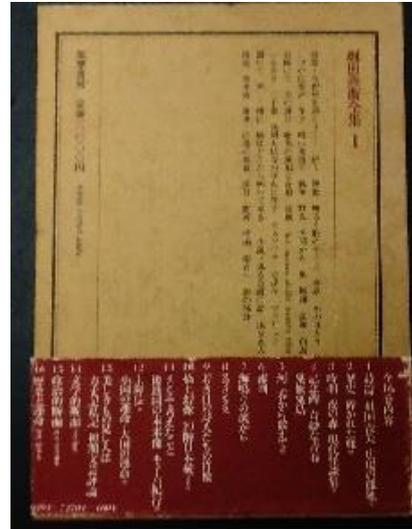
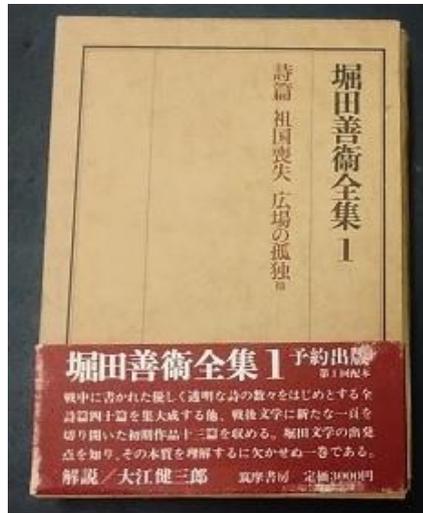

essais ころみ 2019年11月

(再掲) 2019年4月1日(月) 朝のうちは晴れ、新元号発表「令和」
『堀田善衛全集』見なおす試み

堀田善衛全集(筑摩書房 1974年6月20日発刊開始)



2019年11月1日(水) 秋晴れ

11月に入った。でもずっと暖かい。これからはこんな季節感になってくるのか、風景になかなか秋がみえない。日はしっかり短くなっているけど。

— 会社員時代の学び、以降の学び —

会社員時代もはるか昔になった。ふと考えた、会社員時代に学んだことって何だろう。仕事のやり方とか、そういうことではなくて、自分なりに得た社会観、組織観といったような学

すぐには出てこない。余りに昔すぎてか、若すぎて何も考えていなかったか。最終的に一つ、“会社員として働く限りはどこへいっても大差ない”。そう自分なりにわかって、独立へと舵をきった。

それから試行錯誤、悪戦苦闘して、今に至っているが、仕事はみっちり人と関わること、とにかくたくさんの人と行き交ってきた。今もそれは続いているが、相手の可能性を拓く助けになるのが仕事だから、言葉をかけるにしても当然、相手によかれと思うことを言う。

個々人、その人にとって良いと思うこと。時には苦言もあるし、新しい試みを勧めることもある。内容も小さなことから、少々ハードルの高いこともある。とにかく様々。

共通して言うとしたら、基本は3つ。できる限り「朝型」にしましょう、「読む、書く、覚える、算ずる、まとめる」の習慣をもちましょう、そして「自分に観察の目」をむけましょ

ただ、良かれと言っても、その判断は相手に依る、相手に裁量権。こちらはただただ、働きかけるのみ。わたし自身も同じようにたくさんの人からいろいろな働きかけをうけてきたが、取捨選択して、今に至る。

さて、独立してからの学びは何かといえば、一番は、「人生、すべては自分しだい」かもしれない。〈学び〉というより、ある種の〈悟り〉か。わたしばかりでなく、そう思い至る人は多いはず。

すべては自分しだいと思えるなら、結果のよしあしも、人のせいにせず、自分にたちかえる。仕方なかったと納得したり、次の発奮材料にしたり。いずれにせよ、精神衛生上、よいのではないか。

その他、独立してからの学びは、あれもこれも、あがってくる。会社員時代のことは、〈学び〉ではなく、〈資質〉を表す象徴的な場面が、あれやこれやと出てくる。

それらは、今こうしているワケがよくわかるものであった。いやはや、本当に人生、おもしろい。独立してからの学びのもう一つ、「生きるって、自分で自分を知る、解明する道のりだ

2019年11月11日（月） 晴、雨、曇

まだそれほど寒くない。モミジもまだ青い。でも週末から冬に一変するそう。昨日最終の衣替え完了、冬準備万端。

一 『堀田善衛全集』に始まり、今年は見なおし年？ 一

今年も残り50日になった。その年ごとに公私ともに大小の特徴があるが、今年は〈見なおし〉年だったよう。

昨年末の段階では処分しようと思っていた『堀田善衛全集』。今年に入ってから、いやいや、もう一度見なおせばいいのではないかと思い直して、すきま時間に少しずつ進めている、急ぐこともないし。

9月、『自然は導く』という本を買った。案内をみて、これは買いだと直感した。実際読み始めると、電車の中でもどこでもすぐに読めるようにしたいと感じた。バック型のブックカバーなんかあれば、いいのだけど…。

どこかで売っていないかなあ…。うん？、待てよ、自分で作ればいいのではないか…。でもどうやって？ その時思い出したのが皮製ノートバインダー。かさばるのでそのうち使わなくなったもの2つ。

この2つが単行本と新書用にピッタリ。仕上がった〈ブックバック〉は皆が感心するほどのデキ。自分でも、“なんといいものができたこと！”

この2つのブックバックが出来たおかげで、ずっと本棚の飾りにしていた本を読む気になったから、おもしろい。やはり道具、シチュエーションは大事ということか。まず読む気になったのはモース。

8年前2011年に日経の文化欄で紹介された「マルセル・モース」。初めて知ったが、レヴィ・ストロースや岡本太郎が大きな影響を受けたというので、出たばかりに『マルセル・モースの世界』を買った。

読み始めて、なぜこれをまず読もうと思ったか、わかった。9月に読んだ『未来への大分岐』に通じる点があるように感じたからだ。

モースを読んで、つぎに選んだのが、『カルチュラル・スタディーズ入門』。1999年7月に出た本。当時知り合った人から教えてもらった「カルチュラル・スタディーズ」。

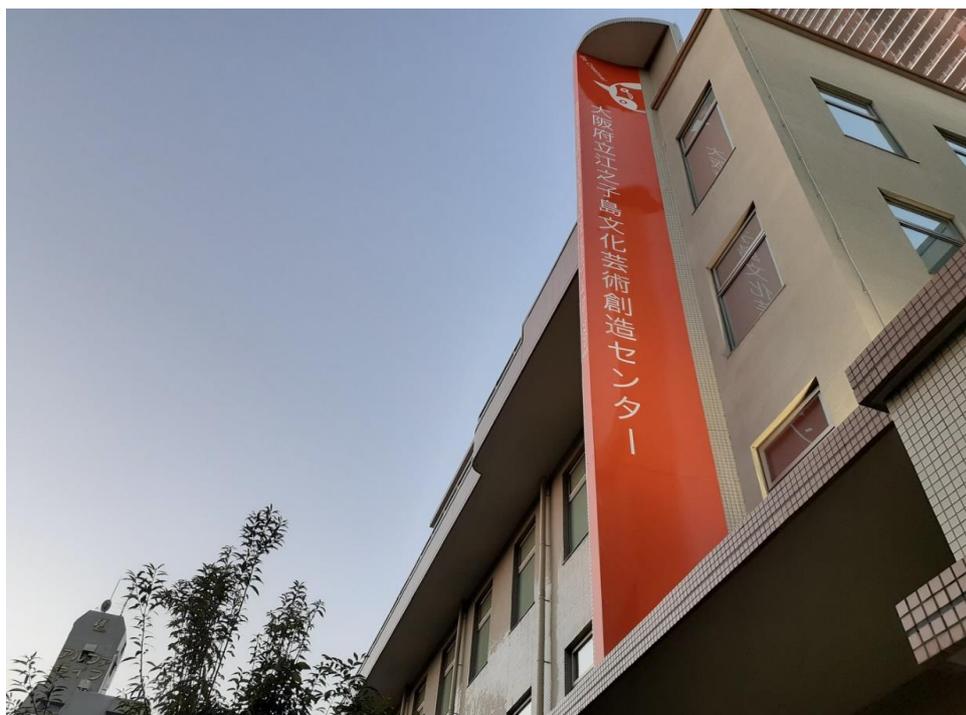
自分の知らない世界が本当にたくさんあるんだなあ…と未知の領域に出会った感覚は今もよく覚えている。すぐに買ったけど、でも20年眠らせていた。ようやく今、読み始めたばかり。

本といい、モノといい。よくよく見なおすと、まだまだ自分のものにしていなかった気がする。「樹木希林」さんの言う〈始末〉の意味が少しわかったような…。

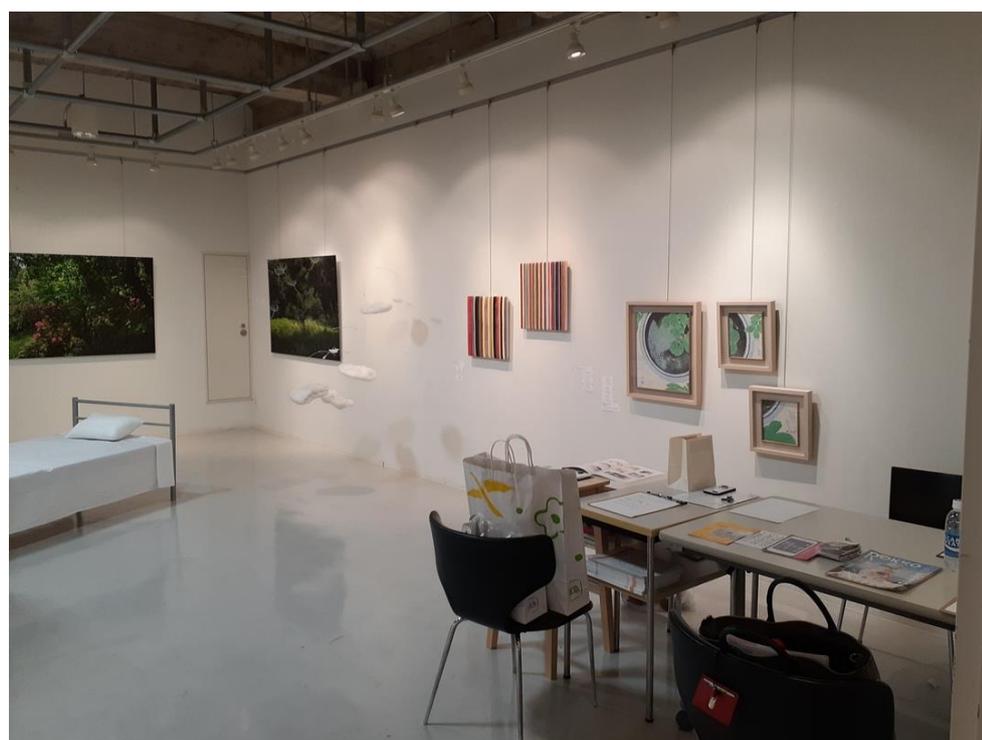
こういう心持ちになれたのは、よろこんでいいのではないかな。まだその説明はうまくできないけれど。

2019年11月12日（火）

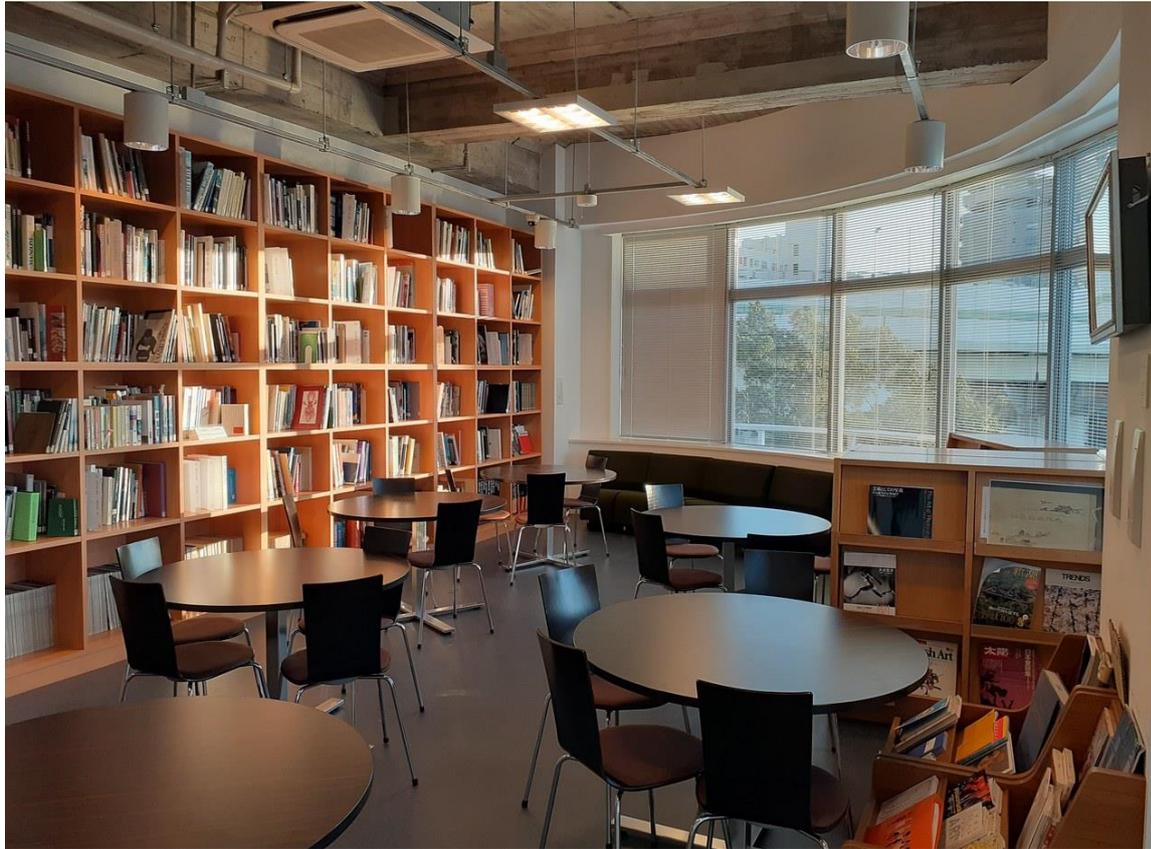
ホスピタル・アート展 at enoco



会場の大阪府立江之子島文化芸術創造センターは初めて。見学もかねて、「ひというプロジェクト」主催のアート展へ。昨年に続き2年目。大阪市の「女性チャレンジ応援拠点」担当日夜に初めて来られた時から22年ほど。ずっと、ほぼ一人での活動。孤軍奮闘が続くが、内にすえた使命感がアーティストに響き、協力するクリエイター少なからず。



このセンター、なかなか良い空間。4 fのライブラリーは贅沢な個人の書斎のよう。誰でも利用できるらしく、公的な施設としては、穴場。



2019年11月18日（月） 晴から曇へ

先週から今日にかけて、なんとも暖かい。今日の大阪は日中23℃まで上がる予報。桜の木の紅葉が目についてきたが、モミジはまだまだ。ほんとうに12月が見頃になりそう。

ー アンバランスな世の中でバランスよく生きる考（続） ー

8日アップしたリーズレター2019年立冬に少し書いたテーマの続き。11年前に読んだ『無の探究』（柳田聖山・梅原猛 角川ソフィア）の77ページにこんな一節があった。

「安らぎ（定）は般若ハラミツ-つまり知恵にそのすわりをゆずる。知恵は、新しい人間観の出発を意味した」。

わたしなりの解釈でこの意味するところは、心の安定は知的営みに依る。よい時に舞い上がらず、わるい時に落胆せず、平常心を保ち、やるべきことをやる、あるいは、やってならないことをやらない。

何をやるか、何をやらないか、それもまた自分の考えしだい。最終的には、すべては自分しだい。心身でそう思えたとしたら、それは仕合せなことではないか。自他ともに許容して、何かしら超然と構えられる、はず。

長い時間をかけて、何とか少しはそういう境地をいたった。今まだそこにたどり着く手前という人もいる。いつか来た道、葛藤は容易に想像できる。それも大切な学びだったと追って思える日が来る、と励ましたい。

とにかく何か〈われにかえる〉ことのできる習慣や趣味、あるいは勉強をすることを勧めたい。アンバランスな状況に対してバランスをとるような時間をもつ、場をつくる。それも一つ

2019年11月23日（土）

lgl女子会 at a la main

4年前の創業塾での出会い。今では主催者、受講者、講師の枠をこえてご縁が続き、この日は熟ガール4名の女子会。外でランチをした後、アートレンタルサロン「a la main」さんのご厚意で、午後のティーサロン。話は尽きず、午後6時すぎまで！ なんともしえず落ち着き和む空間と、「類は友を呼ぶ」のなせるワザ。小春日和以上の晴天下、いい哲楽サロンでした。



2019年11月25日（月） 曇

一昨日の23日は11月下旬にしては異常な暑さだった。日差しがキツく、外出の仕度をしている段階から、じわっと汗をかいた。なまじ暖かくするとカラダにわるいと考え、ひと月前の服装で出かけた。そのうちこれが当たり前になるのか…。

一 手紙を書くということ 一

手書きの手紙を書く。あえて〈手書き〉と書くほど、手書きが少なくなった。昔は入学式のお祝いに万年筆をよくもらった。中学以上のだいたい人は筆箱・ペンケース中に入っていたのではないか。

書かないと、やはり書けなくなるもので、デジタルな流れにそのまま乗っていたら、それでなくてもあまりキレイな字でなのに、ある時、あまりの不細工な字に愕然。急に気づいたしまった。

その時から、差し障りのない範囲で、手書きに替えた。そのタイミングで、そごうのバーゲンでウォーターマンの万年筆が半額で売っていて、数十年ぶりに万年筆を手にした。

その後もう一本、ヴィスコンティのクラシカルな1本をアウトレットで買った。こうして道具のいいものが揃うと、書きたくなるもの。日々の雑感雑記帳は縦書きものを買って、季節の絵葉書を常備するようになった。

年賀状、暑中見舞いといったオフィシャルな季節のご挨拶はリーズレターに代えているが、それ以外の特別な便りは手書き。記念切手も季節感のあるものを買っておいてある。

こちらが誰かとふと思い出したとき、あるいは気になったとき、はたまた読んだ本に感銘をうけてそれを伝えたい時。誰かからかイベントや開業の案内が来たとき、思いがけず贈りものが届いたとき、等々。

間をおかず、すぐに書いて出す。その時点の気持ちのムード、空気感を逃がしたくない。なにより、先に延ばすと、“まっ、いいか”、ということになりやすい。

こういう習慣がかれこれ20年。最近はやほど手書きの便りが珍しくなったようで、感心されることが増えた。それほどなら、人によっては心理的な負担を感じる人がいるかもしれない、と考えたりもする。

でもそれは、次の考えに免じて許してもらおう。Pilotの広告文が語るように、手書きの便りを書く、そのゆるやかなプロセスは、〈想い〉をいかし深める一つの営みだろうから、と。